

朝鮮古寫徽州本『朱子語類』について

—兼ねて語類體の形成を論ずる—

石 立 善

はじめに

初期朱子學の成立史において、朱子（一一三〇—一二〇〇）の文集や古典注釋書とともに、南宋人によって大量の朱子語録が編纂され流傳したことは重要な意味を有している。黎靖德編『朱子語類大全』以前の古本朱子語録がほとんど傳わらない今日、九州大學所藏朝鮮古寫徽州本『朱子語類』は天下の孤本であると同時に、朱子語録の原初的狀態を窺える貴重な存在である。

一九五九年に楠本正繼氏によって、その家藏する朝鮮古寫徽州本『朱子語類』の存在が學界に公開され、さらに一九八二年に中文出版社から景印本が刊行され、大きな注目を浴びたのである。以來、日本では通行本『朱子語類大全』（以下「語類大全」と略稱）を讀むには欠かせない必讀書とされ、近年中國大陸で編纂された『朱子全書』所收の『朱子語類』の對校本にも採用された。

しかし楠本氏の紹介後、朝鮮古寫徽州本を取り上げた論考は校勘關係の一篇のみで、古寫本の詳しい書誌情報や基づく底本、成立年代、性格、そして景印本の問題點についての研究が、半世紀経つにもかか

わらずなお現れていない。さらに、古寫本の内容をより深く理解するためには、なぜ今の朱子語録が分類した語類體になっているのかという問題、つまり語録から語類への轉換的過程を考えねばならないが、從來の朱子語録研究ではこの問題を追及する姿勢が皆無であった。古寫本は南宋の徽類（徽州刊本）の面貌を傳えるものであり、徽類の底本、すなわち亡びた蜀類（眉州刊本）の原貌に最も近い存在であるので、古寫本を通して蜀類と徽類の原貌に辿り着くことができよう。

本稿はかかる問題意識のもと、まず第一章では書誌學の視點から朝鮮古寫徽州本（以下「古寫本」と略稱）を考察する。第二章では始めて朱子語録を分類した黃士毅の事跡を調べた上で、蜀類の成立背景、語類體の創出の要因及びその影響を考える。續いて第三章では蜀類の重刻増補本にあたる徽類はどのように成立したのか、黃士毅の分類を受け継いだ意味とはいかなるものか、そして黎靖德編『語類大全』の果たした役割とは何か、という從來不明であった問題を取り上げ、古寫本に見える記述を手がかりに考究する。以上によって、『語類大全』までの、語録體から語類體形成への思想的展開を探る。

一、朝鮮古寫本についての書誌學的考察

(一) 書誌情報

筆者が二〇〇七年十月に實見した朝鮮古寫徽州本『朱子語類』は、貴重書として九州大學文系合同圖書室に所藏されている。以下、この古寫本の詳しい書誌情報を記しておく。

九函、四十二冊、全一百四十卷。毎冊の表紙の左上に「朱子語類」、左下に「幾」(冊數)が墨書される。内框縦二十二點三糎、横十四點八糎。木版朱刷りの框郭、四周雙邊無界、上下朱色黒口、對向雙魚尾、版心上部に木刻黒色「朱子語類卷」が押され、中央部に「篇名葉數」がある。毎冊首葉の天頭に朱文圓印「拂」、朱文方印「九州大學圖書」、框郭内に朱文長方印「晦堂藏弄」の印章が捺されている。卷首に淳祐辛亥良月望日呂午序(半葉七行、行十一字)、「晦庵先生朱文公語類總目」、「李侯貫之已刊三十二家」、「今增多三十八家」、「鄱陽語錄增九家」、己卯九月望日黃士毅序あり。卷末に淳祐壬子六月望日蔡抗跋(半葉七行、行十四く十六字)がある。「晦庵先生朱文公語類總目」の七葉裏に「新本再校正凡千有餘/字寶祐二三年春正月後/學臨邛魏克愚謹識」とある。

本文は半葉十行、行二十く二十三字、小字雙行注、語錄每條二三行以下低一格。各卷の卷首に「晦庵先生朱文公語類卷第幾」と題される。卷一の九葉と十葉、卷二の二葉は後の補鈔。ただし、第三十三冊所收の卷九十七の二十六く二十八葉は朱刷りの框郭なし。また、第三十八冊所收の卷百十八く卷百二十一は明萬曆本による補鈔、その紙もほかの冊と異なる。朱筆による框郭があり、四周雙邊無界、

版心に墨書「卷幾 葉數」、語錄本文は半葉十行(卷百二十一のみ半葉十一行)、行二十一く二十二字、小字雙行注、卷百十八の首葉に「重鈔朱子語類卷百十八」と題される。第四十冊所收の卷百二十七く百二十九の版心下部には、字數や文字の大小、刊工の名(成、范、思、明、庚、唐、慶、時など)が見える。

第一冊の表紙見返しに貼紙三枚あり、右より「徽州所刊寶祐二年再校正/朱子語類百四十卷 黃士毅分類 大全序目乙板所謂蜀中所刊語類/一百四十卷者 徽州刊朱子語類後序云/相與謀以蜀本語類刊之/黎靖德大全序目後記云/徽本附以饒錄續類則此外附以饒錄續類歟更考」、「語之從類黃子洪士毅始爲之史廉叔公說刻之蜀近歲徽州又刻之/黎靖德大全序目/後記三十七く四/徽本附以饒錄續類又增前類所未入亦爲有功 惜其雜亂重複讀者尤以爲病云々/同上三十七く三」、「高麗元統二年(一三三四A.D.)版/韻府群玉ト紙質相似ス」。

古寫本は「皇上」(呂午序一葉表)、「朝」(語類總目 六葉裏)及び宋朝皇帝の名など避諱すべきところについて、いづれも改行したり、空格をあけたりしているので、その基づく底本は宋刻本であるに違いない。また、第二十七冊所收の卷七十七は文字の阙けている部分が多くあり、第三十冊所收の卷八十四の版心(第十五葉まで)に近い部分、さらに第三十九冊所收の卷百二十六の三十葉裏から三十七葉裏にかけて版心に近い下部の文字の闕損も見られる。古寫本はこうしたところには文字を書かず空白としている。この事實から、古寫本の基づく底本の一部には、當時すでに蟲食いなどによる破損が存在したことが判明する。

貼紙三枚は文體と筆跡から、すべて日本人によるものと思われる。

一枚目は『語類大全』序目の文とその巻首に見える蔡杭「徽州刊朱子語類後序」を節引したもので、二枚目は『語類大全』序目後記の徽州刊本に觸れた部分を寫したものである。三十七葉という葉數表示から見ると、これらは舊藏者あるいは鑑定者が寛文八年（一六六八）の和刻本『語類大全』の記述から古寫本の源流を探った痕跡であろう。三枚目の紙はほかの二枚と比べ比較的新しいものであり、紀元の表記や筆跡から判断すると、楠本正繼氏のものだと考えられる。

古寫本の一部の版心に見える千字文の番號の墨書に注目したい。全體の順序は「宙」、「洪」、「荒」、「張」、「寒」、「來」、「暑」、「往」、「餘」、「成」、「歲」、「律」、「呂」、「麗」、「水」、「玉」、「昆」、「岡」、「劍」、「號」となっている。例えば、第五册所收の卷十四く卷十五の版心に「宙」、第六册所收の卷十六の版心に「洪」、卷十七の版心に「荒」、第七册所收の卷十八の版心に「荒」……第四十二册所收の卷百三十七く百四十の版心に「號」が書かれている。つまり、古寫本の據った底本は元々千字文を通し番號として装丁されたものである。その底本全一百四十卷の装幀は「天」から「號」までの全五十册であると思われる。古寫本の中の缺番、「天」、「地」、「玄」、「黃」、「宇」などの册は書寫者にその番號を寫されなかっただけであろう。古寫本は最初册數もその底本に従っていたが、後になって現在の四十二册に改装されたと思われる。

さて、古寫本の書寫年代について述べてみよう。現存の古寫本は完全なものではなく、卷百十八「訓門人六」く卷百二十一「訓門人九」は後の補鈔で、内容は明萬曆三十二年（一六〇四）の朱吾弼刻本による。また、第一册所收の卷一の九葉と十葉、卷二の二葉も補鈔であるが、この部分の字體は卷百十八く卷百二十一のそれによく似ており、

朝鮮古寫徽州本『朱子語類』について

その紙質や版心、朱筆による框郭などから見ても同じ時期の同一人の鈔寫と思われる。これらの部分の補鈔は十七世紀以後に行われたに相違ない。補鈔以外の部分の書寫年代は不明であるが、藤本幸夫氏の調査によると、現存最古の朝鮮刊本『朱子語類』は李朝嘉靖二十三年（中宗三十九年、一五四四）刊本で、この銅活字本を含めて、その後のほぼすべての朝鮮刊本は明の成化九年（一四七三）陳煒刊本に基づいたものであるという³⁾。従って、古寫本は朝鮮で成化本系統の流傳普及以前、すなわち十六世紀中葉以前に書寫されたものであろうと推測し得る。朝鮮でも稀觀本のように、ほとんど知られていなかったであろうが、ただ、以下の古寫本卷百十六に見える第五十二、五十三條の襲蓋脚録に注目したい。

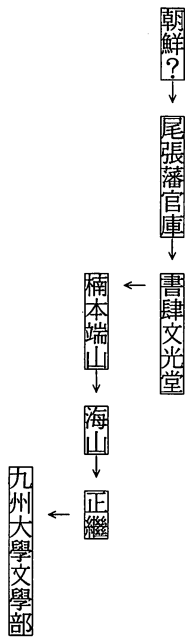
蓋卿稟辭、且乞贈言。先生曰、「逐日所相與言者、皆所宜着工夫、不用重說。」蓋卿又請曰、「此來幸甚、侍傳約之誨、所得洪多、然於承教之願猶未深愜、來歲儻尙未死、繼得爲遠謁函丈之計。」……
甲寅八月三日、蓋卿以書見先生于長沙郡齋、請曰、蓋卿願從學久矣、乃今得遂所圖、然先生以召命戒途有日、殊爲匆匆、即欲隨諸生遇晚聽講。先生曰、「甚好甚好。」是晚請教者七十餘人。……

成化本をはじめとする諸本（卷百十六の第十七、十五條相當）にはいずれも傍點の文字が見えないが、しかし傍點の文字は朝鮮英祖四十七年（一七七一）嶺管刊木版本の卷百十六末付録の校勘記「考異」に見える。つまりこの木版本の編纂者は古寫本かその底本にあたる徽類を見たことになる。木版本の「考異」に列せられた異文が古寫本によっ

たとするならば、古寫本が日本へ傳來した年代の上限は十八世紀七十年代となる。これは現在、朝鮮の文献に見出せる唯一の、古寫本が閱讀された痕跡である。

(二) 基づく底本と版本の傳承

日本における古寫本の流傳の經緯に關しては、楠本正繼氏によれば、最初尾張藩の官庫の舊藏であり、後に書肆文光堂に賣り渡され、その後楠本家に入ったといふ。前節で述べたように、古寫本には「悔堂藏弄」の藏書印が捺されている。「悔堂」とは、楠本氏の祖父楠本端山(名は後覺、一八二八〜一八八三)が嘉永四年(一八五二)の仲秋に自警するために自ら付けた號である。従つて、『語類』を愛讀した端山が書肆文光堂からこの古寫本を購入したのは一八五一年から一八八三年の間だといふ可能性があらう。古寫本は端山からその子である海山(名は正翼、一八七三〜一九二二)の手へ、そして孫の正繼氏の所藏となった。楠本正繼氏が九州大學を退官した二年後、昭和三十七年に同大學文學部に寄贈されたのである。いかなる經緯で朝鮮から尾張藩に傳來したかは不明であるが、以上から、古寫本における傳承の大筋は、



となる。

さて、ここで古寫本の基づく底本について考察してみたい。尾張藩の藩儒、朱子學者である細野要齋(名は忠陳、また爲藏、字子高、一八一〜一八七八)は古寫本を實見し、官庫書目に中國の寫本と記述されているのを疑い、「この寫本は紙質と筆勢のいづれから見ても朝鮮人が寫した徽州本である」といふ。嘉永六年(一八五三)五月に、要齋は尾張藩の明倫堂典籍に擧用されたので、彼が古寫本を實見したのは一八五三年以後だと思われる。「朝鮮古寫徽州本」と呼ばれるように、要齋の説は楠本氏の紹介で現在通説となつてゐる。また、岡田武彦氏は「朝鮮古寫本には呂午の序だけが載せられてゐる」ことから、徽類には呂午の序を冠するものと蔡杭の後序を冠するものとが流傳していたのかもしれないと推測し、さらに「魏克愚が呂午の序を冠する徽類を校正してこれを紫陽書院で刊刻した」といふ結論を得た。しかし、要齋の説から生まれた「朝鮮古寫徽州本」といふ呼稱はもとより精確ではないし、岡田氏の論證にも甚だ疑問がある。

まず、岡田氏は古寫本の卷末に載せられてゐる蔡杭の後序を見落としてゐる。實際には第一節で述べたように、古寫本は呂序、蔡序を共に有してゐる。次に注目しなければならないのは、「晦庵先生朱文公語類總目」の七葉裏に見える以下の魏克愚の識語である。

新刊本について全部で一千餘字を再校正した。寶祐二年(一二五四)春正月、後學臨邛の魏克愚謹んで識す。

魏克愚が徽類を校正したことは事實であるが、その校正本を刊刻した形跡はどこにも見あたらない。以下、論述の便宜を圖り、古寫本と

徽類關係の序や跋、識語を年代順で並べておく。

① 淳祐辛亥（一二五二） 良月望日呂午序（古寫本卷首）

② 淳祐壬子（一二五二） 六月望日蔡杭跋

（古寫本卷末、『語類大全』卷首附録）

③ 寶祐二年（一二五四） 春正月魏克愚識語（古寫本卷首）

④ 寶祐甲寅（一二五四） 仲冬長至日建陽蔡杭後序

（『蔡氏九儒書』卷八「徽州朱子語類後序」）

呂午の序は一二五一年十月に撰じたもので、この時點では呂氏は「書板ができた」（「板成」としか言っていない。印刷して書物にまとめたのはそれより後であろう。淳祐壬子（一二五二）六月の蔡杭の跋文は「（編纂が始まって）二年が経って書物が出來た」（越二歲而書成）という。つまり徽類の編纂には計二年が掛けられた。一二五一年十月から一二五二年六月までの八ヶ月の間、徽類が實際に刊行されたかどうかは、今のところ確認できないが、『蔡氏九儒書』卷八「久軒公集」所收の蔡杭「後序」の内容は古寫本のそれに比べて簡略であり、日付も「寶祐甲寅仲冬長至日」となっている。その記載が事實ならば、徽類は寶祐二年（一二五四）の冬に再刊されたこととなる。しかし古寫本に見える蔡杭跋の日付はなお淳祐壬子（一二五二）六月のものである。また王秘の徽類の序文によれば、魏克愚から紫陽書院刊行の徽類が送られてきたのは、淳祐十二年（一二五二）十月よりやや前であることが分かる。一二五四年仲冬の日付の蔡杭後序が載せられている魏氏の校刊本が存在したかどうかは、今では分からない。しかし、一二五二年六月の日付の蔡杭後序本は魏氏の校刊本に據ったものではな

朝鮮古寫徽州本『朱子語類』について

いことは明らかである。つまり、この古寫本が基づいた底本は單なる徽州刊本ではなく、魏克愚の寶祐二年校記の書き入れが入っている淳祐十二年（一二五二）の徽州刊本、すなわち魏氏の手校本であると思われる。

この推論を支える有力な内容的根拠は、古寫本の本文のところでこの見える校勘記の存在である。まず、古寫本第三十七册所收の卷百十七の第二十六條黃義剛録「林子武初到時」條の一部を擧げておく。

容押花字常要在下面後有一人官在其上却挨得

恐是上字

他花字向下面去他遂終身悔其初無思量不合押

「恐是上字」の四字は卷百十七の二十二葉裏の四行目から五行目の行間に見える。その筆跡は前後の本文のそれと一致しており、同一人の筆寫と思われる。「他花字向下面去」の「下」について、「恐らくは『上』の字であろう」とあるのは、古寫本はその底本に書き込まれた校勘記をそのまま寫したのであり、それは魏氏の校勘記の書き入れと推測される。また、「語類總目」の三葉表「維以三子之易」の「維」、卷二の十五葉裏の沈僩録「或問周禮以土圭之法測土深」條の「景夕謂日味景乃中」の「味」、卷三の二十六葉裏の沈僩録「問人之死也不知魂魄便散否」條の「只說到這衰」の「衰」などに對して、それぞれの行間に「繼」、「映」、「裏」といった文字の校正が見えており、いずれも正確なものである。魏氏による校勘記はこれ以外にも古寫本のあちこちに見られるが、さほど多くはない。恐らく書寫者が魏氏の校勘記に従って刊本の誤字や衍字などの大半を改めた上で書寫したためであ

ろう。従つて古寫本の基づいた底本は、ほかでもなく徽州淳祐十二年刊本『朱子語類』の魏克愚寶祐二年手校本である。魏氏の手校本を寫した古寫本の價値は一層高まると言えよう。

魏克愚(一一一九〜一二六九)とは魏了翁(一一七八〜一二三七)の次男で、字明己、號は靜齋である。淳祐十二年(一二五二)に軍器監丞の職を以て徽州の知州となり、寶祐二年(一二五四)に温州の知州に遷された。徽州では民政官として仁政を施したという。つまり魏克愚は一二五二年から一二五四年まで徽州の知州として二年在职した。徽州から離れる寶祐二年の歲、その正月に徽州本に綿密な校正をしたことになる。また、淳祐十二年の冬、魏克愚は婺州東陽縣の王必(字元敬、號は敬嚴)が語類形式を用いて編纂した朱子語錄四十卷すなわち微續類を刊刻した。その父の魏了翁の遺作『九經要義』も魏克愚が徽州在任中に刊行したもので、書板は紫陽書院に置かれた。魏克愚が家學を繼承し、徽州で道學關係書の刊刻事業に盡力したことは明らかである。

これまで、黎靖徳の記述から、徽類が蜀類を重刻する際に、饒録の九家を増入したことは明らかであったが、その九家が具體的に誰を指すのかは未詳であった。古寫本の卷首には「鄱陽語錄增九家」という項目があり、朱子門人の何鎬、滕璘、胡泳、程端蒙、游侃、呂燾、吳壽昌、吳琮、楊長儒の氏名が明記されている。「鄱陽語錄」とは池録の編者李道傳の弟李性傳が編んだ『朱子語續錄』すなわち饒録のことである。上記の九家が饒録において對應する卷數は以下の通りである。

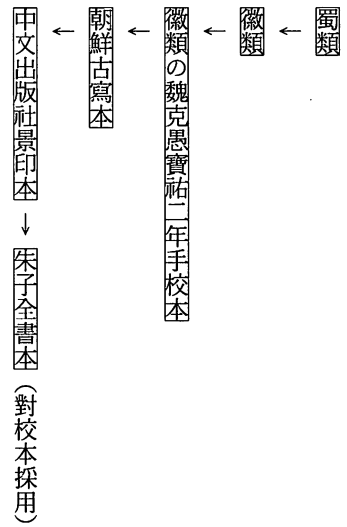
何鎬 卷二 滕璘 卷十七 胡泳 卷三十四
程端蒙 卷三 游侃 卷二十七 呂燾 卷三十六、卷三十七

吳壽昌 卷四十三 吳琮 卷四十五 楊長儒 卷四十四

饒録は全四十六卷、李性傳が寶慶二年(一二二六)から十數年の歲月をかけて輯めた朱子門人四十二家の語録に對して整理を行い、嘉熙二年(一二三八)に鄱陽の學宮で刊刻したものである。實のところ、何鎬や滕璘などの九家以外、徽類はほかの饒録所收三十三家の語録を採っていない。なぜなら、饒録の黃幹、周謨、潘柄、魏椿、吳必大、黃笛、楊若海、楊驥、陳淳、童伯羽、鄭可學、王力行、游敬仲、黃升卿、周明作、蔡熙、楊與立、鄭南升、歐陽謙之、楊至、潘植、王過、董拱壽、林學蒙、林賜の二十五家はすでに蜀類の「今增多三十八家」に見えており、李儒用、黃義剛、林恪、廖德明、潘時舉、董銖、萬人傑、徐寓の八家も「李侯貫之已刊三十二家」、すなわち蜀類所收の「池録」に見えているからである。従つて、徽類の編纂者は蜀類に載っていない饒録の九家の語録だけを補えば十分だと考えたのであろう。ただ、林恪、廖德明、潘時舉、董銖、萬人傑、徐寓の六家は確かにその記録の大部分が「池録」に收められたが遺漏があり、饒録はそれを卷四十六に一括収録し、「池録」の漏れを補おうとしたのである。徽類の編纂者は名前のみによつて機械的に判斷し、上記の六家を收めなかった。これは千慮の一失と言えよう。

古寫本の卷首に見える呂午の序に「文字の訛脱を校正す」(校正字之訛脱)というように、徽類は蜀類を重刻する際、細かく文字を校正した上、「池録」の九家の記録をも分類整理し増入した。要するに、徽類は蜀類の重刻増補本に相當するのである。

以上の考察によつて、古寫本における版本の傳承は次のようになる。



古寫本の全體を見渡すと、書寫は忠實そのもので、語録本文や小注の文字だけでなく、底本の序文と跋の文字の大きさなどに對しても細心の注意を拂い、さらには版心に見える一部の千字文番號や刻工の名まで鈔寫している。底本の原貌をそのまま再現するという方針で書寫したのである。この點は後世の讀者にとっては幸いであるが、多數の手による寫本なので、本文に見られる誤寫や脱文、脱字、衍字も少なくない。

また、古寫本を讀む際、その亂丁や葉數の亂れの問題にも注意しなければならぬ。第三十七册所收の卷百十七において、「玉」八十一葉から「玉」八十六葉までに亂丁が見られる。これに對して、中文出版社の刊行した景印本は古寫本の亂丁に氣づいて整理を行ったようだが、依然として誤っており、さらなる混亂を招いている(一六一七頁下段より一六二〇頁上段まで)。さらに中文出版社が景印した際の手際による亂丁も見られる。例えば、景印本の二十七頁は第二卷の首葉と二葉にあたるもので、本來十八頁の次に並べるべきである。ここ

朝鮮古寫徽州本『朱子語類』について

では一々例示することができないが、古寫本を扱う際、現物を確認せず景印本にのみ頼るのは危険であることを附言しておく。

二、黃士毅と蜀類

(一) 黃士毅の事跡

語類體を創始したのは朱子門人の黃士毅である。黃士毅が編纂した蜀類は後世の語類體の濫觴で、古寫本の底本である徽類はその分類と語録内容の兩方を受け繼いだものである。語類體という體裁の成立は朱子學史においても大きな出來事に違いないが、黃士毅の生涯は依然として明らかにされていない。この節では編者黃士毅について調べてみよう。

黃氏の詳しい傳記類は遺っておらず、略傳は正徳『姑蘇志』卷五十七や崇禎『吳縣志』卷四十八、『莆陽文獻傳』卷二十九、『宋元學案』卷六十九、『閩中理學淵源考』卷十九などに散見される。これらの記述と關係文獻を繋ぎ合わせると、黃氏の生涯のあらすじが見えてくる。黃士毅は字子洪、父は虜、本籍は福建の莆田縣で、後に吳中に寓居した。興化に壺公山があり、壺山を自號として、故郷を忘れぬという意を示した。黃士毅は幼くして向學の心を持ち、慶元の黨禁の最中、徒歩で福建に入り、最晩年の朱子に師事したのである。朱子は晝には一つの書物を読み、夜には自分の理解を師に尋ねるように命じた。また靜坐する際には雜念が入らないように、自らを覺醒させるためにはぼうっとしないように、と告げた。數月して『大學章句』を授けられ、吳中に歸ったという。また、嘉定七年(一二二四)に黃士毅は平江の知府陳芾に懇請し尹和靖の繪を作製して祀ってもらったという。兄弟子の黃幹(一一五二〜一二二二)も彼を生き残った朱門弟子の一人と

して擧げている。⁽²⁸⁾ 端平年間、知府の王遂（字去非、號は實齋）は士毅のために住宅を購入して住ませた。同郡の名儒黃遠は士毅を「有道の君子」と稱賛している。士毅は自ら滄洲の徒と謂い、考亭名士とも稱され、丹陽縣に卒し葬られた。また、その子の芝老は開慶（一二五九）の進士である。黃士毅の生卒年は不明であるが、端平年間（一二三四～一二三六）まで生存していたことは分かる。

黃士毅は生涯出仕せず、師の學問の顯揚と著述に勉めたようである。士毅は「孔孟の道は周子・程子に至って再び明らかにされ、朱子に至って大いに明らかにされた」と思想上に朱子を高く位置づけ、蜀本『朱子語類』のほか、『朱子文集』一百五十卷や『晦庵書說』七卷を編纂し、『儀禮』にも分類注釋を行った。また『四書講義』、『舜禹傳心圖』、『周程言性圖』、『重遷和靖先生祠堂記』、『文學橋銘』などがある。今『語類大全』には士毅の記した語録が四十數條見える。しかし、士毅の著述はその子孫に顧りみられず、多くは散逸してしまつたといふ。⁽²⁹⁾

(二) 語類體の創出とその思想的影響

黃士毅は嘉定十三年（一二二〇）に刊行した蜀類において、朱子語録を類目別に解體し、理氣、鬼神、性理、學、大學、論語、孟子、中庸、易、書、詩、孝經、春秋、禮、樂、周程張邵朱子、呂東萊、陳葉、陸子靜、老氏、釋氏、本朝、歷代、歷代漢唐諸子、作文、雜類の二十六門に分けた。理を萬物萬事の絶對的な根源と考え、それを軸に語録を解體分類したわけである。

では、一二二五年に刊行された池録は記録者別の語録體を採っているのに對して、なぜ黃士毅は分類を行おうとしたのか。黃士毅は序で「諸家の記した語録に互いに重複があることを問題とする人がいたの

で、そこで（私は）分類して考察校勘を行った」といふ。市川安司氏や友枝龍太郎氏はこの記述に注目し、語録の重複整理のために黃士毅が分類したと考えておられるが、しかし分類を行った理由はそれだけではない。

魏了翁「眉州刊朱子語類序」によると、黃士毅が「嘗て文公の文集一百五十卷を分類編纂し、今はその書が宮廷の藏書機關に所藏されている。また『儀禮』を分類注釋したが、まだ完成されていない」といふ。⁽³⁰⁾ 魏了翁の言葉から、黃士毅が著述や編纂などの際に分類といふ方法をよく用いたことが分かる。黃士毅の愛用する分類的編纂方法は、朱子語録の解體、そして語類體の成立に繋がつたといふよう。つまり語類體は、その内容ならではの重複と雑多さ、及び黃士毅自身の學問上の性格から誕生したものである。朱子の死後には龐大な著述や語録が遺されており、それらを徹底的に分類整理し再統合する必要があつた。師の學說を體系的に整理する際、黃士毅の持つ優れた歸納的能力が大いに發揮されたといふよう。

蜀類編纂の際に黃士毅が行つた分類作業については、先學の論考に詳しいので、そちらに譲る。ここでは從來論じられてこなかった蜀類の成立背景やその思想的影響、問題点を考察してみたい。吳の地に在住する黃士毅の編纂した語類は、蜀人の史公説の要請で四川の眉州で刊行された。史公説は四川の秣陵縣の民間人で、道學に志していた人物のようである。史公説の事跡や具體的な刊行経緯は不明であるが、蜀類の刊行背景としては、宋末には四川の地で朱子學が盛んであつたことがあげられよう。特に朱子の語録書が多く刊行されたことは看過できない。蜀類以外に、度正（字周卿、號は性善）の青衣刊本朱子語録や曹彦約（一一五七～一二二八）編『朱文公師友問答』、史守文編

『朱文公五書問答』など、いずれも四川で刊行されたのである⁴¹。朱子語録書の需要の大きさを物語っている。

黃士毅の蜀類は刊行されて以来、絶大な影響力を持っていた。その影響はテキストとその分類という両面に現れている。まず、蜀類はテキストとして同時代人に重視された。微類のほかに、朱子門人の程永奇（一一五一〜一二二二）の『朱子語粹』十卷や處州の教授である潘埤（字經之、一字介巖）が編んだ『晦庵語類』二十七卷は、いずれも蜀類を底本に使ったのである。また、その主題別の語録分類が持つ影響力は最も大きく、かつ長きに亘る。南宋では、黃氏の分類は微類や『語類大全』に高く評價され、繼承されてきたのである。また王恂の編纂した微續類四十卷も黃氏の定めた門目を用いた書物である。呂午の微類序に「子洪は朱子の言葉进行分类したが、廉叔はまた南軒張子の言葉も分類した」と言う。史公説の書物も黃士毅の編纂法から啓發を受け、倣ったものと思われる。宋代以後、黃士毅の分類は黎氏『語類大全』によってさらに影響を擴大し續けた。朱子學の正統的官學的書物として、明の『性理大全』や清の『御纂朱子全書』の分類はいずれも『語類大全』を参照し作られたのである。さらに『性理大全』の分類は以後の多くの道學書に重んじられ、とりわけ朝鮮の宋時烈（一六〇七〜一六八九）編『程書分類』にも大きな影響を及ぼしたのである。次に蜀類の問題点について觸れておこう。『朱子語粹』はその内容上の「純駁不一」を問題とし、蜀類の抜粹本を作り、潘埤編『晦庵語類』のほうは、蜀類の論語門の遺漏を補うつもりで作ったのである。さらに黎靖徳は蜀類の問題点を校正の不備、内容の重出、分類の誤りの三点にまとめている。校正については、景定四年（一二六三）に撰した「語類大全序」において、黎氏は「子洪が定めた門目はかなり精

密で詳細であり、編纂の作業が精勤であったが、しかし廉叔がそれを刊刻した際、校正をしなかったので、文字には甚だ誤りや脱字があり、あるものは讀めなくなっている」と指摘し、「考訂」では蜀類はもとと同じ内容の記録が重出するところがあり、「蜀類の條目は精密で詳しいが、なお分類を誤っているところがある」という。上記の問題は、蜀類は膨大な量を持つ上、その編纂に關わる者が少なく、池録や後述の微類には遙かに及ばないので、人手不足で校正や照合が十分にはできなかったことによると想像される。

また、巻数や内容の量が多くなると、記録者別の語録體よりも語録體のほうが、内容の檢索と比較吟味の面において、實用性が高く合理的である。要するに、語録體は百四十卷にも達する大型編纂に適している。蜀類以後、語録體を用いた朱子語録書が多く編纂刊行されたことは、このことを雄辯的に語っているだろう。蜀類の成功はほかでもなくその實用性の高さにあるが、ただそれは兩刃の劍でもあろう。池録のような語録體は記録者ごとにその記した語録を並べるだけで、弟子たちのノートの本來の面貌を忠實に伝えるものだが、蜀類のような語録體となると、集めてきたノートをすべて解體し、主題別に並べ直すため、各自のものとの記録配列順や年代などの原始的情報が破壊されてしまふのである。これは體系化にともなつて生まれた問題の一つに數えられよう。

古寫本卷首「今增多三十八家」には「盧淳」という記録者の名が記されているが、しかし『語類大全』巻首の「朱子語録姓氏」には見えない。蜀類の記録者の一人、盧淳の名が漏れていることが分かる。つまり、『語類大全』所收の記録者は從來言われていた九十七家ではなく、九十八家となる。

『宋史』道學傳に名を連ねてはいないが、朱子の學問の體系化と傳播から考えると、黃士毅は黃榦や陳淳、李方子らに肩を並べる、朱子學史における重要な人物と位置づけられる。黃士毅の功勞はほかの朱門の弟子とは違い、學統の設立と彼自身の著述にあるのではなく、師の遺著の體系的な分類整理に存するのである。

二、微類の成立及び語類體の定着と成熟

(一) 微類の成立とその周邊

語類體の形成における決定的進展は、微類によってなされた。微類の成立は語類體の思想史的展開に繋がる重要な問題でありながら、今までの研究はこの問題には簡單に觸れるのみで、詳しい編纂事情や背景などは未だに不明である。古寫本には『語類大全』に見えない約一千二百字の呂午の微類の序が見え、卷末の蔡杭後序も通行本のそれと比べると異同があり、字數もやや多い。ここでは呂、蔡二人の記述を手がかりに微類の成立を考えたい。

呂午(一一七九〜一二五五)^{②)}は字伯可、徽州歙縣の人で、嘉定四年(一二二二)の進士である。その著述には『竹坡類藁』五卷と『左史諫草』一卷が傳存されている。微類の序文は呂午が淳祐十一年(一二二五)に撰じたもので、つまりその晩年の作である。この時の呂午はすでに郷里に隱居している。その序文は呂氏の文集『竹坡類藁』^{③)}にも收められておらず、貴重な資料である。

呂序は微類刊行の経緯と背景について詳しく語っている。まず、朱子語録編纂の前史に觸れた部分を次に引く。

故固(因)朱子與門人問答、名(各)記所聞、李心(道)傳貫之

嘗合爲『語錄』、而池本出焉。彼其會粹三十三家而鏡之梓、雖未免重複、惟在學者參考而自得之、亦既得朱子編『遺書』之意矣。至嘉定庚辰・辛巳間、建安楊與立始約爲『語略』、行於東南。而眉丹稜史公說廉叔、時亦得莆田黃士毅子洪『語類』、增於池本三十八家者、刊之于蜀、最爲詳備、而蜀本出焉。是又得朱子『語孟集義』與『近思錄』之意矣。洪平齋獨先得是書、東南之士多未之見也。邇年蜀經兵火、廉叔之弟敏叔崎嶇萬里、護是書之板至江陵、今實于鄂。東南諸郡亦未有第二本也。僅有所謂『格言』・『精語』繼『語略』而出、皆非朱子語錄全書也。

故に朱子が門人たちと交わした問答を、(門人たちが)それぞれ聞いた内容を記したものによって、李道傳(字貫之)が嘗て『晦庵先生語錄』にまとめ、池本が世に出たのである。彼が三十三家の記録を集めて刊刻したものは、内容上に重複があるとはいえ、ただ學ぶ者が參考として自得するのが肝要であり、その書はやはり朱子の『二程遺書』編纂の意を得ているのである。嘉定の庚辰(一二二〇)・辛巳(一二二二)の頃に至って、建安の楊與立が始めて節略し『朱子語略』を作り、東南地域に流布した。眉州丹稜縣の史公說(字廉叔)も當時莆田の黃士毅(字子洪)が池本に三十八家の記録を増加した『語類』を手に入れ、四川で刊刻した。その書は最も詳しく、完備されており、蜀本が世に出たのである。その書はさらに朱子の『語孟集義』と『近思錄』編纂の意を得ているのである。洪平齋だけがいち早くその書を得たが、東南の士はほとんど見ていない。近年、四川は戦亂を経ているので、廉叔の弟敏叔は萬里の路程を涉り、蜀本の書板を江陵まで守護して運び、現在は鄂州に置かれている。東南の諸郡はやはり蜀本の再版がなく、ただ所謂『朱子語

録格言』や『傳道精語』が『朱子語略』の後に續いて刊行されただけで、どれも朱子語録の全書ではない。

ここで呂午はまず朱子が自ら編纂した周知の書物を代表として、『論語』——『程氏遺書』——朱子語録、そして『語孟集義』・『近思錄』——朱子語類、という體裁の繼承の關係を明らかにし、語録編纂における「録」と「類」をはっきりと區別し、各自の存在意義を論じたのである。さらに東南地域に朱子語録の全書がないことや蜀本の流布事情を歎き、楊興立編『朱子語略』や葉士龍編『朱子語録格言』、李方子編『傳道精語』は朱子語録の全書ではないため、東南地域における蜀本の再版の必要性があると述べている。一方、蔡杭の跋文は、まず語類の體裁は『論語』の編纂に倣ったものといひ、「學而」、「里仁」、「八倍」、「鄉黨」などの内容によって分類された篇を代表として取り上げ、さらに『易』繫辭傳や程伊川の言葉を根據として、分類の重要性を述べている。呂、蔡二人の朱子語録の分類を根據つけた發言には、正統的意識がはたらいっており、語類體の編纂方法の根源を孔門の編纂にまで遡らせたものと言える。つまり、この徽類刊行によって初めて語類體が正統化・合理化されたと言えよう。

呂午の語録への強い關心は當然その道學的立場によるが、山長の張文虎をはじめとする紫陽書院の關係者が呂午に序文を求めた理由は恐らくそれだけではない。實は呂午は朱子のかかなり近い親戚にあつてゐる。その妻祝氏が朱子の母親の從姪女で、祝穆（字和甫）などの祝氏一族とも交わりがあり、穆の子祝洙（字安道、また宗道）は呂午の弟子にあたる。方回（一一二七〜一三〇七）が呂午を眞德秀（一一七八〜一二三五）や魏了翁に肩を並べる者として、「妻の家傳を得てお

り、文公の學問を發明する」と朱子の學脈を受け繼いだ者と評價したのもそのためである。

徽類の刊行事業は徽州の紫陽書院を中心に行われた。周知のように、徽州は朱子にとって縁のある地で、朱子學的雰圍氣も非常に濃厚である。もともと徽州の郡學には、當時の知州、朱子門人の趙師端（字知道）によって嘉定七年（一一二四）八月に建てられた朱文公祠堂があり、淳祐六年（一二四六）に知州の韓補（字復善、號は思軒）が紫陽書院を創建し、理宗が額を書いて下賜した。徽類刊行の最初のキーマンは徽州通判の洪勳とその父洪平齋である。呂午が淳祐十一年（一一五二）十月に撰した「歙縣新學記」によると、最初熱心に刊行事業を提唱したのは洪勳である。また蔡杭の跋文によれば、創立間もない紫陽書院には朱子の書が完備されていないため、通判の洪勳と博士の張文虎が語類の刊行を圖ったという。洪勳は字伯魯、諡は文靖、平齋の長男、淳祐四年（一二四四）の進士である。洪勳は徽類刊行のきっかけを作り、家藏の蜀類を紫陽書院の關係者に重刻用の底本として提供したのである。呂序に登場した平齋は、洪勳の父咨變の號である。洪咨變は字舜兪、臨安府於潛縣の人で、嘉泰二年（一一〇二）の進士である。洪勳は父の遺訓として、『語類』の重要性を教わったという。洪勳が提供した蜀類も咨變から繼いだものと思われる。しかし、刊行事業がまだ完成していないのに、洪勳は任期満了となり徽州を去った。徽類刊行におけるもう一人のキーマンは、洪勳の後に徽州に赴任してきた太守の謝望である。謝望、字升道、號は恕齋、臺州臨海縣の人、丞相の謝深甫（一一三九〜一二〇四）の曾孫で、理宗皇后の謝道清（一一二〇〜一二八三）の甥にあたる。謝望は淳祐十年（一一五〇）に徽州に着任した當初から、學問に深く留意し、學宮で先聖を拜み、

紫陽書院で朱子の遺蹟を拜謁した。また、翌年の一二五一年九月、歙縣の新しい縣學を落成させたのである。一方、一百四十卷にも達する徽類の刊刻には膨大な費用と人力が必要となる。洪勳離任後、張文虎がなんとか費用を節約して刊刻事業を續けようと務めていた大切な節目に、謝望は大いに金や米を寄付したり、刻工や版木材料を集めたりして、多大な協力をした。洪勳が語類刊行を表明してから二年の歲月を費やして、ようやく徽類の公刊を實現したのである。そして書物の校正などの仕事は張文虎などの紫陽書院關係者が行った。張文虎は字炳叟、福州寧德縣の人で、淳祐元年（一二四一）の進士である。呂序は徽類の校正について一言しか言及していないが、第二章で述べたように、蜀類は校正上に多くの不備があるので、張文虎らの校正作業は大變であったと想像される。ちなみに徽類編纂者の校正した好例として、古寫本卷六十五の十八葉表の周謨錄「謨問先天圖卦位」條の「而春分」に對し、蜀本の脱落した十五字を附注していることがあげられる。この部分の校勘成果は後の『語類大全』にも吸收されたのである。ここで徽類の後跋を書いた蔡杭（一一九三～一二五九）にも觸れる必要がある。蔡杭は字仲節、號は久軒、建寧府建陽縣の人、蔡沈（一一六七～一二三〇）の次男、朱子最晩年の門人である。楊方や包揚など朱子門人の二十三家の語録を集め、饒後錄二十六卷を淳祐九年（一二四九）に饒州で刊行した。蔡杭「祭紫陽書院文」には「徽州の通判である洪勳に委託して祭祀を行ってもらう」という。ここから蔡杭と洪勳との官僚間の繋がりも見えてくる。また、呂序によると、當時江東の提刑である蔡杭と江西轉運司幹辦公事である程元鳳（一一〇〇～一二六九）は前後して、洪勳の司っている紫陽書院の學田を増やす援助を行ったという。徽類の出來榮えは素晴らしく、「字畫が明白整齊

で、蜀本に比べて勝っている」という善本ぶりであった。その後、紫陽書院は景炎元年（一二七六）に戰亂によって廢れてしまった。そのため、書院に藏された書板もほとんど全滅したという。それ以後は徽類も絶版となったのであろう。

上で述べてきたように、徽類の編纂には朱子門人や姻戚、後學、地方官、書院關係者などの多くの人が関わっている。とくに注目すべきは、やはり積極的に參與し刊行事業を大きく推進させた洪勳と謝望、そして後に綿密な校正を行った魏克愚のような朱子學を信奉する地方官たちの存在である。その後、洪勳は兵部尙書、謝望は知樞密院というように、それぞれ朝廷の高官に昇りつめた。朱子學は理宗朝に最も重視され、淳祐・寶祐年間はその絶頂期にあたる。まさに呂序の初めに言うように、「朱子の書物は、天子に表彰していただき、益々天下に尊顯されるようになった。」官學の雰圍氣の中で生み出された徽類は、以前に刊刻した池録や蜀類を取り巻く環境とは、天壤の差がある。それは朝廷の『四書集註』尊崇と同じように、朱子學官學化の時代的象徴であろう。これは徽類編纂ならではの特徴と言える。

徽類は蜀類の語類體を受け継いだと同時に、その體裁についての理論化を進めたのである。このような理論上の自覺こそが語類體に決定的進展をもたらし、その確固たる地位を築きあげた。つまり、朱子語録編纂史は徽類に至って、語類體が定着され、新しい段階に入ったのである。

(二) 『朱子語類大全』へ

さて、上の節で我々は、語類體の正統化・合理化という理論づけは徽類の段階で行われたと考察したが、語類體の形成における最終的完

成を成し遂げたのは、黎靖徳（一二二六～一二七六）とその『語類大全』である。

咸淳六年（一二七〇）に江西で刊行された『語類大全』は、蜀類の語類體と類目を完全に踏襲し、「竝行而錯出」する「四録二類」すなわち池録、饒録、饒後録、建別録及び蜀類、徽續類の内容を一書にまとめた。上述したように、徽類は蜀類の上に饒録の九家を増補するに止まったが、『語類大全』は収録内容を最大限に拡大し、最も完備した朱子語録を旨とした野心的な編纂である。黎靖徳は集めてきた語録群を参考校勘し、遺漏したものを收め、誤りは改め、異同を調べ、それまででない規模の総合的整理をし、補完を行った。

劉璣（一二四〇～一三一九）が撰した「前朝請大夫邵武郡侯黎公墓誌銘」によると、黎靖徳は字共父、永康軍導江縣の人、福建に出仕し、南劍州將樂縣の黃因の家に婿入りしたので、閩の人となった。南劍州沙縣の主簿、撫州宜黃縣や邵武軍邵武縣の知縣を歴任し、後に建昌軍や邵武軍の通判、邵武軍の太守などの地方官をつとめた。その間に、黎氏は公務以外の時間を利用して『語類大全』を編纂し、江西書院で刊刻した。徳祐元年（一二七五）八月、黎靖徳は知邵武軍事に着任したが、冬、江西西路制置使の黃萬石が元軍に敗れて、邵武に逃げ込んだ。南宋に叛逆し元に降参しようとする黃萬石の貳心を察知した黎靖徳は、翌徳祐二年（一二七六）に辭職し將樂縣に退隱した。同年十二月、黎氏は住まいを盜賊に襲われ、殺害されたのである。その死は亂世に生きたが故の不運と言えよう。また、凌迪知『古今萬姓統譜』卷十四は黎靖徳を浙江の永嘉縣の出身とし、北宋の嘉祐年間（一〇五六～一〇六三）に沙縣の主簿をつとめたと記している。凌氏の記述は通説になっているが、大きな誤りである。『天祿琳琅書目』卷六や『珥

朝鮮古寫徽州本『朱子語類』について

宋樓藏書志』卷三十九などはいずれも凌氏の誤りを踏襲している。

語類體という體裁の選定から、『語類大全』は蜀類や徽類といった大型の語類體編纂の延長線上に生まれたと思われる。これは黎靖徳が序文で蔡杭の徽類後序での論證を引用したことからも窺うことができる。黎氏と徽類との直接的な繋がりは見えないが、彼の才能は洪平齋の次男、洪勳の弟である洪巖（字仲魯）や曾穎茂（字仲實）に高く評價され、推薦されたことを附言しておく。

まず注目したいのは、『語類大全』に現れている資料批判の編纂態度である。それまでの語録諸書の編纂は單なる資料集に過ぎないが、黎氏はそれらの編纂方針とは逆に、思い切って重複した記録一千一百五十餘條を削除したのである。これは黃士毅の重複を保留する編纂態度とは對蹠的である。さらに、諸書の疑わしい記録、そして廖德明録や周謨録に見える朱子の書簡の類、及び程端蒙録や呂燾録に見える『四書或問』や『集注』の部分もすべて削った。重複や疑わしい記録を削除したことの妥當性は、今では知りようもないが、『語類大全』約十卷以上の分量に相當する語録が黎氏一人の價值判斷によって姿を消したことは、後世の讀者にとっては殘念なことに違ひなからう。黎氏は序文で讀者に對して、朱子のいう「精擇審取」の態度で語類に取り組むべきだと語っているが、實のところ自分の編纂もその態度ですでに買っていたと言えよう。また、黎靖徳は蜀類に分けられた二十六の類目の下に、さらに各卷において再分類を行い、細かい類目を設けた。つまり語類體を活用すると同時に完備させ、その實用性を一層高めたのである。

ともかく『語類大全』に至って、その収録範囲は大いに擴大され、類目も精密化にされた。内容の豊富さと類目の完備においては、從來

のすべての語録書を壓倒したのである。語類體はこの時、いよいよ成熟期を迎えた。そして『語類大全』刊行後、「四錄二類」などの語録書は省みられなくなり、やがてほぼすべてが亡佚してしまったわけである。しかし一方、『語類大全』は巨大化し、「朱子語錄百科全書」的存在となつてしまった。もはや気軽に讀了できる書物ではなくなつたのである。その巨大化の問題と解消については別稿を準備する。

また、古寫本を扱うには、まずその底本の微類と『語類大全』との關係が一體どのようなものであるかを知らなければならぬ。『語類大全』巻首に掲げている底本には微類の名が入っていない。黎靖徳は微類を手に入れたが、校勘用としてのみ使つたと思われる。黎氏は微類と微續類に對して、「微本は饒錄（の九家）を附録し、續類はまた前類（蜀類と微類）に收めなかつた記録を増入し、やはり功績がある。惜しいことに兩書の内容が亂雑で重複しており、讀者はとりわけこれを問題視した」という。また、黎氏「考訂」には微類に觸れた校勘記二條があり、「微類は蜀本を翻刻し、すでに饒錄の九家の記録を増入したが、しかしまた誤りも存在している。今刊正する」、「微類や微續類の集めた語録は遺漏がないはずだが、しかし池錄の中にはなお十數條が取り入れられていないし、饒錄の遺漏がとくに多い。今増入する」と指摘されている。

上記の蜀類の校正や微類と微續類の混亂重複の問題は、黎氏の『語類大全』編纂を促した原動力の一つだと言えよう。しかし、古寫本には『語類大全』に見えない多くの佚文や異文が載っていることから、黎靖徳は微類を完全に底本として使つてはいないと考えられる。それは、微類の底本である蜀類がすでに採用されている上に、饒錄も取り入れたのであるから、微類を底本の一つとしては用いる必要がないと

判断したからであろう。部分的には微類の記録は黎氏の書に取り入れられたところがあると考えられるが、全體的に見ると、微類は黎本『語類大全』の系統とは異なると思定できる。

以上の考察によつて、語類體の思想的展開が三段階を経たことは明らかである。蜀類は語類體の創出を、微類は語類體の理論化を、そして『語類大全』は語類體の収録内容の擴大と類目の完備を成し遂げたのである。とりわけ『語類大全』の刊行や流傳によつて、語類體はついに語録體にとつて代わり、主流の座を獲得したのである。初期朱子學史の全體から見ると、語類體の出現と發展は、膨大でかつ混亂錯綜の様相を呈していた朱子語録群を整理統合せねばならない、という時代の要請であつたのだらう。

おわりに

最後に本稿で得た結論をまとめておく。

朝鮮古寫本の詳しい書誌情報を調査することによつて、その底本が淳祐十二年（一二五二）の徽州刊本魏克愚寶祐二年手校本であることが明らかになった。十六世紀中葉以前に朝鮮で書寫されたもので、日本へ傳來した年代の上限は十八世紀七十年代であろうと推測し得る。古寫本は本來底本と同じく五十冊に分けられたが、後に四十二冊に改装された。多數の手による古寫本は、底本の原貌を忠實に復元しようとしているが、亂丁や誤寫、脱文などの問題も少なくない。中文出版社の景印本には亂丁があるため、研究の際には現物を確認することが必須である。

黃士毅の蜀類は朱子學隆盛の地である四川で刊刻され、テキストと分類の両面において、後世に多大な影響を與えた。その主題別の語類

體は、語録の重複整理や黃氏自身の學問上の性格によって創始されたものである。蜀類の重刻増補本である徽類によって、黃士毅の分類とその語類體は正統化・合理化され、定着されるに至った。また、徽類は朱子學の官學化の産物であり、その成立に紫陽書院を中心に朱子の弟子、親族、後學、地方官たちなどが密接に関わっていたことがそのような時代性を象徴していると言えよう。徽類は『語類大全』に校勘用としてのみ用いられたため、兩者の系統は異なる。黎靖德編『語類大全』になると、語類體は内容の面において、それまでの語録書を集成大成し、さらなる充實を見せ、ついに語録體を乗り越え、主流の地位を奪ったのである。

朝鮮古寫本『朱子語類』は、日中朝三國の歴史を繋いだテキストとして、朱子學傳播史の縮圖の一つと言えよう。今後、『朱子語類』のテキスト研究、ひいては朱子學研究において、貴重な資料として利用されるであろう。

附記 二〇〇七年十月三日から四日にかけて、朝鮮古寫本『朱子語類』について閲覽調査を行った際、三浦國雄先生、柴田篤先生、南澤良彦先生及び九州大學文系合同圖書室の関係者の方々に大變お世話になった。附記して深謝の意を表させていただく次第である。

注

- (1) 拙稿「古本朱子語録について——『朱子語類大全』未收語録書三十七種——」(クリスティアン・ウィッテルン、石立善編『東アジアの宗教と文化』所収、一六九—二〇五頁、西脇常記教授退休記念論集編集委員會、二〇〇七年十二月)を参照。

朝鮮古寫徽州本『朱子語類』について

(2) 本稿の用いている『朱子語類大全』の版本は明成化九年(一四七三)陳煒刊本である。

(3) 『朱子語類校勘記 其の一』、九州大學文學部宋明思想研究室、一九五九年九月。

(4) 『朝鮮古寫徽州本朱子語類』、中文出版社景印、一九八二年七月。

(5) 田中謙二『朱子語類外任篇譯註』(汲古書院、一九九四年八月)のよりに『朱子語類』の譯注にあたって、朝鮮古寫本を底本としたこともある。

(6) 『朱子全書』第十四冊—十八冊、上海古籍出版社・安徽教育出版社、二〇〇二年十二月。

(7) 徐德明「朝鮮古寫本『朱子語類』的校勘價值」(『邁入二十一世紀的朱子學——紀念朱熹誕辰八百七十週年・逝世八百週年論文集』所収、華東師範大學出版社、二〇〇一年十一月)。また、古寫本に簡単に觸れたものとして、岡田武彦「朱子語類の成立とその版本」(『中國思想における理想と現實』所収、木耳社、一九八三年九月)がある。

(8) 胡適「『朱子語類』の歴史」(『胡適手稿』第九集卷一所収、胡適記念館、一九七〇年六月)、市川安司「朱子語類雜記」(『朱子哲學論考』所収、汲古書院、一九八五年五月)。初出『東京大學教養學部人文科學紀要』第二十一輯(國文・漢文學VI)、東京大學出版會、一九五九年四月)、友枝龍太郎「朱子語類の成立」(『朱子の思想形成』附録二所収、春秋社、一九六九年三月)。初出『日本中國學會報』第十五集、日本中國學會、一九六三年十月)、前掲岡田武彦「朱子語類の成立とその版本」を参照。

(9) 「朝鮮における『朱子語類』——それは如何に扱われたか——」、『朝鮮學報』第七十八輯、朝鮮學會、一九七六年一月。

(10) 前掲『朱子語類校勘記 其の一』巻首の楠本正繼「序」。

(11) 岡田武彦『楠本端山——生涯と思想』(積文館書店、一九五九年十月)を参照。

- (12) 楠本海山の事跡と學問に關しては、柴田篤「楠本海山覺書——ある崎門學者の生涯と著述——」(『香椎瀆』第四十九號、福岡女子大學國文學會、二〇〇三年六月)と「楠本家三代の家學と退溪學」(『中國哲學論集』第三十一・三十二合併號、九州大學中國哲學研究會、二〇〇六年十二月)を參照。
- (13) 『九州大學文學部同窓會會報』第三十四號所收の福田殖「表紙解説」、九州大學文學部同窓會、一九九一年三月。
- (14) 細野要齋の傳記については、「細野要齋小傳」と「細野要齋略年譜」(『名古屋叢書』第十九卷「隨筆編(2)」)所收「感興漫筆」(上)卷首解説、名古屋市教育委員會、一九六〇年四月)を參照。
- (15) 前掲「朱子語類校勘記 其の一」卷首楠本正繼「序」、「要齋は官庫書目に唐寫本とあるのを疑ひ、此本紙品筆勢並朝鮮人寫徽州本者也と識るした。」ちなみに、この手記は古寫本に見えておらず、要齋の「感興漫筆」と「諸家雜談」にも載せられていない。
- (16) 前掲岡田武彦「朱子語類の成立とその版本」、三二二頁。
- (17) 清同治七年(一八六八)刊本、卷八「久軒公集」所收。
- (18) 『朱子語類大全』卷首附録、王恂「徽州刊朱子語類後序」、「新安魏史君、蓋鶴山先生之嗣也。近以紫陽所刊『語類』爲寄、因以『續類』爲請、而慨然欲併刊之、以全書院之傳布、其樂於闡明文公先生之遺訓蓋如此。」
- (19) 魏克愚の傳記は『咸淳臨安志』卷四十九や嘉靖『徽州府志』卷四、卷六に見える。
- (20) 前掲王恂「徽州刊朱子語類後序」。また、王恂は二四八〜二四九年の間にすでに發録を編纂刊行していた。『郡齋讀書志』附志卷第五下「晦翁先生朱文公語後錄二十卷」條は王恂の序を引用し、「池錄初成、勉齋猶未免有遺恨於刊行之後、况饒本又出於其後乎。此二十卷皆池・饒所未及刊者、稽其所自、證其所得、嘗屢反復焉、無一語或敢不謹也、」
- 「晦翁始與南軒講于嶽麓、後與東萊及象山講于鵝湖、此皆先賢講論大端、深恨從游者莫能錄其所聞以示後世云」という。
- (21) 『九經要義』淳祐十二年魏克愚刻本のうち、『周易要義』殘本と『禮記要義』は中國國家圖書館に、『毛詩要義』は天理圖書館に、『儀禮要義』は臺灣國立故宮博物院の圖書文獻館に、それぞれ所蔵されている。
- (22) 方回「跋周易集義」(胡一桂「周易啓蒙翼傳」中篇「魏文清公周易集義」條所引)。この文は『經義考』卷三十三「周易要義」條にも引かれているが、方回の『桐江集』と『桐江續集』には載せられていない。
- (23) 『朱子語類大全』卷首、黎靖德「考訂」。
- (24) 『朱子語類大全』卷首附録、李性傳「饒州刊朱子語類後序」。
- (25) 『郡齋讀書志附志』卷五下「晦庵先生語類錄四十六卷」條を參照。
- (26) 景印本の正しい頁順は、一六一七頁上段→一六一九頁下段→一六一七頁下段→一六一八頁上段→一六一八頁下段→一六一九頁上段→一六一〇頁上段、となる。
- (27) 『漫塘集』卷二十三「平江府虎丘山書院記」、「姑蘇志」卷二十四「學校書院附」。
- (28) 『勉齋先生黃文肅公文集』卷十四「復李真之兵部」、「向來同學之士、今凋零殆盡。閩中則潘謙之・楊志仁・林正卿・林子武・李守約・李公晦、江西則甘吉文・黃去私・張元德、江東則李敬子・胡伯量・蔡元思、浙中則葉味道・潘子善・黃子洪、大約不過此數人而已。」
- (29) 傳記は『宋史』本傳に見える。
- (30) 『吳郡文粹續集』卷三十六や『姑蘇志』卷二十一「橋梁」下、文學橋條所收「文學橋銘」を參照。
- (31) 古寫本卷首、黃士毅「序」、「孔孟之道至周程而復明、至朱子而大明。」
- (32) 『直齋書錄解題』卷二。『晦庵書說』の佚文は『書傳輯錄纂注』に散見する。また、『宋史』藝文志は書名を「朱熹書說」に作っている。
- (33) 『四書纂疏』卷首「引用總目」や『四書通』卷首「四書通引用姓氏書

目」を参照。

- (34) 『勉齋先生黃文肅公文集』卷二十六「舜禹傳心周程言性二圖辨寄黃子洪」。
- (35) 『吳郡文粹續集』卷十四、『姑蘇志』卷二十七「壇廟上」和靖先生祠條。
- (36) 『北溪大全集』卷首王環翁「序」、思昔吾莆陳復齋・鄭子上・黃子洪諸老與先生同在朱門、著述今無一二、其子孫亦不顧惜。」
- (37) 原文、「或病諸家所記互有重複、乃類分而考之。」
- (38) 前掲市川安司「朱子語類雜記」や友枝龍太郎「朱子語類の成立」を参照。
- (39) 『朱子語類大全』卷首附錄。原文、「嘗類文公集百五十卷、今藏之策府。又類注『儀禮』、未成書云。」
- (40) 前掲市川安司「朱子語類雜記」や友枝龍太郎「朱子語類の成立」、姚瀛艇「黃士毅與『朱子語類』」(『河南師大學報』「社會科學版」一九八二年第四期、河南師範大學、一九八二年七月)を参照。
- (41) 前掲拙稿「古本朱子語錄について——『朱子語類大全』未收語錄書三十七種——」を参照。
- (42) 同上を参照。
- (43) 前掲王泌「徽州刊朱子語類後序」。
- (44) 原文、「子洪既類朱子之語、而廉叔又類南軒張子之語。」
- (45) 『程書分類』卷首「凡例」を参照。
- (46) 『朱子語類大全』卷首、「子洪所定門目頗精詳、爲力屢矣。廉叔刻之、不復讎校、故文字甚差脫、或至不可讀。」
- (47) 同上、「蜀類自有複見者。」
- (48) 同上、「蜀類條目精詳、然猶有誤入類者。」
- (49) 前掲岡田武彦「朱子語類の成立とその版本」。
- (50) 呂午の傳記は方向「宋故中奉大夫右文殿修撰致仕歙縣開國男食邑三百戶贈華文閣學士通奉大夫呂公午家傳」(『新安文獻志』卷七十九所收)を

朝鮮古寫徽州本『朱子語類』について

参照。

- (51) 『竹坡類藁』の現存のテキストはただ中國國家圖書館所藏清鈔本(續修四庫全書)第一三二〇冊所收)のみである。
- (52) 『黃氏日鈔』卷三十七が呂序の僅かな一部を節引し、日付も寫していない。
- (53) 『朱子語略』や『朱子語錄格言』、『傳道精語』については、前掲拙稿「古本朱子語錄について——『朱子語類大全』未收語錄書三十七種——」を参照。
- (54) 『論語』一書、乃聖門高第所集、以記夫子之嘉言善行、垂訓後世。『朱子語類』之編、其亦倣是意而爲之者也。或曰、『語必以類相從、豈「魯語」意歟。』曰、『學而』一篇所記多務本之意、「里仁」七章所記皆爲仁之方、若「八佾」之論禮樂、「鄉黨」之記言行、「公冶長」辨人物之賢否、「微子」載聖賢之出處、亦何嘗不以類哉。天下之理、「同歸而殊塗、一致而百慮、非有以會而通之、則祇見其異耳。」「大傳」曰、「觸類而長之、天下之能事畢矣。」而伊川之誨學者亦必曰、「將聖賢言仁處類聚觀之。」然則「語類」之集、其有功於學者多矣。』
- (55) 前掲方向「宋故中奉大夫右文殿修撰致仕歙縣開國男食邑三百戶贈華文閣學士通奉大夫呂公午家傳」を参照。
- (56) 『竹坡類藁』卷三、「跋晦庵記外大父祝公道事」。
- (57) 前掲方向「宋故中奉大夫右文殿修撰致仕歙縣開國男食邑三百戶贈華文閣學士通奉大夫呂公午家傳」、「公得其家傳、發明文公之學。」
- (58) 『勉齋先生黃文肅公文集』卷十七「徽州朱文公祠堂記」。
- (59) 『朱子實紀』卷十一所收諸葛泰「紫陽書院記」と韓補「御書紫陽書院四字謝表」、「御書跋」を参照。
- (60) 『竹坡類藁』卷一。
- (61) 「先是別駕洪宗諭勳得蜀『文公語類』、欲刊置書院、未果而滿去。侯至、銳意捐帑成之、雖費重無靳、所以惠後學甚渥。」

- (62) 「新安舊有紫陽書堂、而紫陽之書未備也。郡倅洪君、博士張君相與謀。」
- (63) 洪勳の傳記は『咸淳臨安志』卷六十七「洪咨夔傳」の附傳や『南宋館閣續錄』卷七を参照。
- (64) 洪咨夔の傳記は『咸淳臨安志』卷六十七「洪咨夔傳」や『宋史』本傳を参照。
- (65) 『宋史』本傳によると、謝深甫は慶元の黨禁の際、朱子を始めるとする道學者に同情的な態度を取ったという。
- (66) 謝望の傳記は『姑蘇志』卷四十に見える。
- (67) 嘉靖『徽州府志』卷六。
- (68) 前掲呂午「歙縣新學記」。
- (69) 呂午「徽州刊本朱子語類序」。
- (70) 『淳熙三山志』卷三十一。
- (71) 蔡杭の傳記は葉采「文肅公墓誌」(『蔡氏九儒書』卷八「久軒公集」附錄)に見える。
- (72) 『朱子語類大全』卷首附錄、「饒州刊朱子語後錄後序」。
- (73) 『蔡氏九儒書』卷八所收、題目の小注に「委徽州通判洪勳致祭」とある。
- (74) 程元鳳は徽州の人で、紹定元年(一二三二)の進士である。傳記は『宋史』本傳を参照。
- (75) 呂午「徽州刊本朱子語類序」。
- (76) 同上、「字畫明整、視蜀本爲勝」。
- (77) 前掲方回「跋周易集義」を参照。また、『桐江集』卷一「送紫陽山長劉仲鼎序鉉號悅心」に「乙亥・丙子之間、戍將李銓以北兵將至、詭曰守城乏材而毀之、祭器書版、蕩爲烏有」という。
- (78) 呂午「徽州刊本朱子語類序」、「朱子之書、恭遇皇上表章而益尊顯於天下」。
- (79) 徽類の類目は蜀類のままではない。古寫本では卷百三十八、卷百三十九、卷百四十の類目は「論文上」、「論文下」、「雜類」となっているのに對して、『語類大全』では「雜類」、「論文上」、「論文下 詩拾遺 問遺書」となっている。黃士毅が序文で語った義例及び卷首「語類門目」を見ると、『語類大全』は蜀類に一致するのである。徽類の門目は概ね蜀類に従ったが、一部の調整も行ったのであろう。『語類大全』は一部の細目を増入したが、徽類より蜀類の類目を忠實に受け継いだのである。
- (80) 『水雲村藁』卷八。
- (81) 『宋史』吳楚材傳、「德祐元年、建昌降。明年春、楚材還其鄉領村、糾集民兵。時江西制置使黃萬石走邵武、遂繇邵武守黎靖德請于萬石、乞濟師、萬石不許、而授楚材迪功郎・權制置司計議官以安之、且戒勿興兵。」
- (82) 『朱子全書』第十四册『朱子語類』卷首「校點說明」も誤っている。
- (83) 『水雲村藁』卷八「前朝請大夫邵武郡侯黎公墓誌銘」を参照。また、『四庫全書』本は「曾」の字を「魯」に誤っている。
- (84) 『朱子語類大全』卷首、景定四年「語類大全序」と「考訂」を参照。
- (85) 『晦庵先生朱文公文集』卷七十四「程氏外書後序」。
- (86) 拙稿「『晦庵先生語錄大綱領』攷——附錄朱子・范如圭・程端蒙・李方子の佚文——」(『中國思想史研究』第二十八號、一二六頁、京都大學中國哲學史研究会、二〇〇六年三月)を参照。
- (87) 景定四年「語類大全序」、「徽本附以饒錄、續類又增前類所未入、亦爲有功。惜其雜亂重複、讀者尤以爲病。」
- (88) 原文、「徽類雖翻蜀本、已增入饒錄九家、然亦有差誤、今刊正」、「徽類・續類會粹當無遺矣、然池錄中猶有十餘條未入、饒錄中遺者尤多、今增入」。
- (89) 古寫本に見える朱子語錄の佚文を別に拙稿「朝鮮古寫本『朱子語類』所見語錄佚文輯存」として準備している。